
税関の現場から 中部国際空港が開港

名古屋税関中部空港税関支署
税関広報官 大家 正久

平成17年2月17日（木）、中部国際空港が開港しました。

中部国際空港は、わが国では初めて民間の株式会社（中部国際空港株式会社）が建設、運営、管理に当たる3,500メートルの滑走路を備えた24時間運用の国際空港で、国内では成田、関西空港に次ぐ国内3番目の規模の国際空港となりました。

24時間運用に対応した職員配置

これまでの名古屋空港は7時～21時までの発着時間帯制限があり、また、滑走路が短い（2,740m）ことから大型貨物専用機の利用が困難なこともあって、定期貨物便は週5便に留まっていました。しかし、中部国際空港は、これらの障害が解消されたことから、貨物便に便利な深夜を中心に便数が増え、開港時点で週24便と大幅な増便となりました。一方、旅客便は週271便（平成17年1月末現在の名古屋空港は週213便）となっており、さらに新規就航便の予定も多数入っており、順調な滑り出しとなっています。

中部空港税関支署では、こうした深夜の航空機の入港や貨物の通関等の行政需要に応えるため、旅行者の手荷物などの通関手続きを行う旅具取締部門及び輸出入貨物の通関を行う特別通関部門を24時間体制にして業務処理に当たっています。

麻薬探知犬管理センターも移転

開港に併せて、麻薬探知犬管理センターも名古屋空港から中部空港島に移転しました。13頭の麻薬探知犬がこのセンターを拠点として、中部国際空港や名古屋外郵便出張所等で覚せい剤や麻薬などの摘発に活躍します。

国内初の空港の総合保税地域

港湾地区の総合保税地域は、全国に4箇所ありますが、空港での総合保税地域は国内初とな

りました。総合保税地域は各施設間の保税運送手続きが不要などのメリットがありますが、中部国際空港は、国際エアライン上屋、フォーワーダー上屋、免税売店、機内食工場などの施設のほか、旅客ターミナルビル1階のパブリックスペースに一般の見学者も見ることができる保税展示スペースも設けられています。

誰もが使いやすいユニバーサルデザイン

中部国際空港の旅客ターミナルビルは、バリアフリーをさらに一歩進めた「年齢や障害の有無に関わらず全ての人に使いやすい」というユニバーサルデザインが基調となっています。税関の施設も例外ではなく、入国検査場のカウンターは名古屋空港のものより少し低い65センチメートルの高さにしたほか、携帯品申告書などの記載台も従来の高さのものに加え、車椅子の旅行者が利用できる高さのものも設置しました。

テーマパークのような空港

中部国際空港は、商業施設も充実しています。旅客ターミナルビルの4階を中心に100余りのレストランやショップがあり、開港から1ヶ月で来場者は200万人（航空旅客を除く一般の見学者）を超えました。商業施設の中でも特にユニークなのは銭湯です。連日長蛇の列ができる大人気の「宮の湯」は、展望風呂に入りながら飛行機の離陸や海に沈む夕陽を眺めることができます。また、空港内で結婚式を挙げることもできます。1階のセンターピアガーデンで式を行ってから、2階のレストランで披露宴。その後は直ぐに飛行機でハネムーン旅行といった計画も可能です。人気も上々で今年は既に80組の予約が入っているとのこと。

中部国際空港は、3月25日から9月25日まで開催される2005年日本国際博覧会（愛知万博）の玄関口として世界各国からの訪問客を迎えます。

